小林一茶と連句（俳諧連歌）

――「鼻先の」（歌仙）の巻――

藤田　万喜子

一、はじめに

連句について、高浜虚子は、「はさま〳〵の宇宙の現象、それは連絡のない宇宙の現象を変化の塩梅克く横様に配列したもの」、「横断的即ち横に各種の現象の切口を格別に観察する」、「宇宙現象の横断的描写、戯曲小説等の輪切的縮図」（「聯句の趣味」　ほとゝぎす　明32・5）、「時間を徹し空間を徹した宇宙、人生の一大縮図」（「連句論」　ホトトギス　明37・9）と述べ、連句は人生生活の断面図であると言っている。この考えに従うと小林一茶の連句にも生活者としての一茶が姿を見せているはずである。

一茶の身分は農民。近世社会の作り出した農民生活者であった。また、一茶は、俳諧に親しみ、文化人とも繋がり、その自覚の中で俳諧人として文化の担い手でもあった。本稿では「文政二年九月十七日夜会」の前書きがある「鼻先の」（歌仙）の巻の鑑賞を通して、俳人一茶を捉えてみたい。

二、表（オ）

1　鼻先の生姜畑や一しぐれ　春甫
2　囲炉裏ばた迄鶏遊びつゝ　一茶
3　手廻しになんぼ［も］箒を結立て　松宇
4　川の御幸の近よりにけり　呂芳
5　植添し松に早速三ケの月　素鏡
6　誂ひむきにさをしかのなく　柏葉

春甫の発句は

鼻先の生姜畑や一しぐれ　春甫

で、「や」の切字を用い、名詞止めの、発句の格を有した詠みぶり

である。季の詞は「しぐれ」で、冬。

「私の家は、鼻先まで生姜畑が広がっている田舎住まいである。雪の多いここでは、冬になってこのところよく時雨れるようになったよ。皆が先生を囲んで楽しく歌仙を巻こうというときに、丁度、興をそえるようにひとしぐれ降って来た。」の意味で、すぐ近くの生姜の作ってある畑の風景を据えた。

春甫は、本名村松熙。俳諧を長野の戸谷猿左に学び、漱左といった。文化五年三月、一茶に手紙を送り、これが縁となって一茶から俳諧を学ぶ。春甫は一茶と長沼を結びつけ、一茶の勢力を広げるのに尽力した。

農村風景の発句を示された一茶は、

2　囲炉裏ばた迄鶏遊びつゝ　　一茶

と脇を付けた。季の詞は「囲炉裏」で冬。

「外はすぐそこまで生姜畑が広がっていて、部屋には囲炉裏がきってある大きな農家。冬のためか、家内に鶏を飼っている。囲炉裏の火があかあかと燃えて暖か、その囲炉裏のすぐ端まで鶏が上がって来て遊んでいる。なんと幸せな一時であるよ。」というのである。

発句の農家の外の風景から仲間衆も集る家の中に景を置き換え、農家を引き立てて脇句とした。

畑―囲炉裏―鶏と農家に関わりの深いものが取り合わされて、より農村の風景が彷彿としてくる。

この脇を承けて松宇が第三を

3　手廻しになんぼ［も］箒を結立て　　松宇

と付けている。

松宇は本名を松井善右衛門と言い、長沼に生まれた。名主と問屋を兼ねた地主の家柄で、俳諧を一茶に学ぶほか絵もよくしたという。

季の詞はなく、雑。「て」で留められて第三の付けに則っている。

前句の鶏の遊ぶ囲炉裏の端から想を得て、そこで仕事をする人を配して展開させたもので、「冬は外の仕事ができないので専ら囲炉裏端で藁を編んだりするのだが、今日は箒作りをしているよ。ちょこちょこと鶏が囲炉裏の端に上がって来ては汚すので、前もって何本も箒を用意しているのである。鶏が汚しても困らないように。」と付けた。

この長句の世界を呂芳が

4　川の御幸の近よりにけり　　呂芳

と付けて展開。季の詞はなく、雑。「御幸」は上皇、法皇、女院などのお出掛けの意で、句は、「箒が人目に立つように結い上げられて何本も立ててあるが、これで掃除の準備が整った。いよいよ川の御幸の日も近づいて来たよ。」の意味。

前句の、「手廻しに」作っていた箒は「御幸」があるためその掃

除に使用するものであったと見立て変えたのである。

呂芳は、長沼六地蔵町の経善寺十二世住職。俗姓は、立花氏。俳諧を一茶に学び其一庵と号し、一茶が「七日に長沼呂芳にやどる。此寺はより〳〵寝馴れし寺なれば来し方の咄などに心伸して我家のやうにはらばふ」(『七番日記』)と書き記すほどの親しさであった。

次の付けは五句目であるため

5　植添し松に早速三ケの月　　素鏡

と、素鏡が月を詠み込んで付けた。季の詞は「三ケの月」(三日月)で、秋。

素鏡は、本名、住田保堅。長沼穂保の人。豪農の地主で、村役人をつとめた。一茶に学び、一茶の助言のもとに『たねおろし』(文政九年)を刊行している。別号皎斎。

「川の御幸が近づいて掃除も済み、そこに松の木も植え添えられた。その見事な枝ぶりの松に、その夜は、早速月が懸かって趣きが更に増したよ。三日月と松の景はいかにも御幸にふさわしいことだ。」の意味。夕刻になって松に月が懸かったと和歌的な世界の景色が作り出された。

月の座が済んで、折端の句を柏葉が

6　誂ひむきにさをしかのなく　　柏葉

と付けた。柏葉は、上高井郡高山村の人で、一茶の門人。季の詞は「さをしか」で、秋。

「松に月が懸かって趣きのある上に、それを引き立てるように、特別に注文したかのように、小牡鹿がどこかで鳴いているよ。」の意味。「誂ひむきに」「なく」と聴覚を配した付けで、表の展開の結びを和歌的にさらりと詠んだ。

三、裏(ウ)

7　客莚ひろげる野らの下冷る　　掬斗
8　はした芝居の太鼓きこゆる　　士英
9　いろはかく娘が酌に諷ふらん　　葉
10　烏の声をいはふ別れ路　　斗
11　朝夕の目覚し山と詠りけり　　甫
12　芥子の一重を好な僧正　　鏡
13　真ン丸の月よ〳〵と夕間暮　　斗
14　餅配れとて鵙の鳴らん　　甫
15　石橋の渡り初するやゝ寒に　　英
16　徳利こかすなやよ太郎冠者　　茶
17　あれ花が咲て候さき候　　鏡
18　菫の上にどさり寝聳る　　英

表の折端は、柏葉の「誂ひむきにさをしかのなく」であった。こ

れに掬斗が

7　客莚ひろげる野らの下冷る　　掬斗

と付けて裏の始め、折立とした。

掬斗は本名を中村順石。長沼六地蔵町の人で、農業のかたわら代々医を業とした。俳諧を、父である元調に学び、後一茶の門に加わり、長沼一茶門十哲の一人に数えられる。

季の詞は「下冷」で、秋。「小牡鹿の鳴くのがどこかから聞こえてくる野原、そこに粗莚でなく、上等な客用のむしろをひろげた。広々とした野原は秋の気配で、体のしんそこから冷えるように感じることよ。」の意味。

小牡鹿の鳴く場所を野原と見立て変え、その広がりからくる冷えを感覚的に捉えた句。（この野原にはいくら莚を上等にしても身分の高い人は腰を下ろさないであろう。）

この句の「客莚」を今度は観客用のものと転じて、士英が

8　はした芝居の太鼓きこゆる　　士英

と展開させた。

士英は春甫と同じく長沼に住む人で、西島姓、通称を次郎次と言った。酒造家で、問屋、名主を務めた。長沼一茶門十哲の一人。

「観客用に敷かれたむしろの下から冷えが上がってくるような野原。そこで演じられるのは役者がまともに揃っていない、はした芝居だよ。その芝居を知らせる太鼓の音が響いて聞こえてくる。」というのである。

季の詞はなく、雑。太鼓というと時を知らせる「時の太鼓」のような大きなものもあるが、ここでは芝居の太鼓というのだから小さな太鼓である。その音が野原から聞えてくるといって聴覚に訴えた感覚の句。

「野良」―「客莚」―「はした芝居」という展開がいかにも田舎の風景を想像させる。

この戸外の景に柏葉は

9　いろはかく娘が酌に諷ふらん　　葉

と付けた。

季の詞はなく、雑。恋の座。「いろはかく娘」は恋文を出すために文字を習っている娘であろうか。「手習いをしている年頃の娘が酒の席に出ているのであろう。その娘が太鼓に併せてよい声でうたっているよ。」とした。

ここは、前句の「はした芝居の太鼓」を「酒席の太鼓」に見立てかえての展開である。また、場所が戸外から屋内に転換され、叙景から人情の句、しかも恋の句に大きく変化させられている。

これを承けて再び掬斗が

10　鳥の声をいはふ別れ路　　斗

と展開させた。この句も季の詞はなく、雑。

「別れのときに烏が鳴いた。この烏の声で笑って別れたよ。そこは鄙びたところで烏くらいしかいない土地柄、それで、烏の声で別れを惜しむのだよ。」の意味。

烏の鳴き声によって吉凶を占えるという俗説があるが、この不吉な兆しの烏の鳴き声を用いて「別れ路」と結び付けたのだから恋は実らなかったという設定である。恋はなるべく一句で棄てずと言うが恋離れの句となる。しかし、恋の破局を「いはふ」と表現して結び付けているところに俳諧性が醸し出されて別れの持つ悲しみは表面化されていない。

恋から離れた叙景の句を春甫が

11　朝夕の目覚し山と詠(よめ)りけり　　甫

と承けた。季の詞はなく、雑。「別れ路」を今度は別れ道に置き換えてそこを山としたのである。

「朝な夕なに烏が鳴く。その鳴き声で目を覚ましたり、日の暮れるのを知る。烏の朗らかに鳴く日に別れて行く。その別れ路を目覚まし山と詠じた。」との意味。

前句の「別れ路」から導き出されたこの句、「朝夕の」の表現から時間の経過が分かり、「と詠りけり」という詠嘆の表現から（具体的な内容は分からないが）物語的な出来事を想像させる世界が創り出されている。

次を付けたのは素鏡で

12　芥子の一重を好な僧正　　鏡

と続けた。前句の「朝夕の目覚し山」と詠んだ人を「僧正」と見立てたものである。

季の詞は「芥子」で、夏。芥子はケシ科の二年草で、茎の先に可憐な四弁花を開く。邪気を払う護摩を焚くのに用いる。

「目覚し山という奥深い山に位の高い僧侶が住んでいらっしゃる。その僧正様は芥子の花をしかも一重のものがお好きで栽培しておいでだ。その芥子の花が咲き始め、今はそれの美しさを愛でる僧正の暮らしであるよ。」と展開させたのである。縦横の変化が眼目の運びの中で僧正を登場させて詩境を一転させた。

これに夕刻の時間を発想してまた掬斗が

13　真ン丸の月よ〳〵と夕間暮　　斗

と月の座を付けた。季の詞は「月」で、秋。

「僧正様が一重の芥子の花を愛でておられると、辺りが薄暗くなり、物が見えなくなりかけた頃にぽっかりと月が出た。その月は名月で真ん丸であるよ。なんとも明るく美しいことだ。」とした。

僧正様が今度は名月を愛でておられると展開させたのである。「真ン丸」という表現と、「月よ」という呼びかけ（感嘆）の繰り返

しの表現が軽快な感じを出している。

この軽快な調子に合わせて春甫が

14　餅配れとて鵙の鳴らん　　甫

と展開させる。

「名月が昇った。真ン丸だ。折から鵙の鳴き声が聞こえてきたが、まるでその月が見事であるので『餅を配れ、餅を配れ』と言って鳴いているように聞こえるよ。」とした。

季の詞は「鵙」で、秋。鵙の性質は荒く、秋にキィーキィーと鋭く鳴き、その声は鵙の高鳴きと言われる。この鵙が単に習性で鳴いているのを人間界と結び付けて「餅配れ」と鳴いているのだろうと見立てたのである。

叙景に食べ物を取り合わせて転じ、人情の句となり変化が出た。

これを承けた士英が二度目の付けとして

15　石橋の渡り初するやゝ寒に　　英

とした。前の「餅配れ」の場面を石橋の渡り初めに転換させたもので、餅は祝いの餅だと見立てたのである。

季の詞は「やゝ寒」で、秋。

「石橋が完成した。その完成を祝して餅が配られた。集まった村人たちが次々と渡り初めをする。橋が石でできているためかもしれないが、折から吹く川風もまた辺りの空気も秋の気配が感じられてどことなく肌寒さを感じているよ。」というのである。

石の橋は木の橋と違って夜でも白く少し浮き上がって見える。この句では石の冷たさと秋季の寒さとが感覚的に響きあって全体を包んでいる。

叙景と人情の句の運びに恋、僧正、植物、動物、食べ物を登場させて変化させてきたここまでの付けの展開を見渡して、連衆の師である一茶が

16　徳利こかすなやよ太郎冠者　　茶

と石橋を渡っている人を太郎冠者に見立てて詠んだ。

季の詞はなく、雑。「やよ」は歌謡のはやしの声や掛け声のこと。

「石橋を太郎冠者も渡り初めしているよ。おい、太郎冠者よ、徳利を倒すなよ。」

石橋の完成を祝って徳利が並べられているのであろう。それを倒してはいけないとしたのである。

太郎冠者は狂言の舞台では失敗を繰り返したり、また舞台を滑稽に変える主役となっている。これまでの付けが真正面から出来事を取り上げて詠まれてきたので、一茶はここで大きな転換を図るために太郎冠者を登場させて笑いに変えたのである。一茶の本領が発揮された。

この太郎冠者に導かれて花の座を素鏡が

17　あれ花が咲て候さき候　　鏡

と、太郎冠者の詞として付けた。

季の詞は「花」で、春。花の座。

「太郎冠者がさも仰々しく言っているよ。あれよ、桜の花が美しく咲いております。咲くのでございます。」の意味。

この語り調子が太郎冠者の持つ滑稽さと相俟って前句を含んで全体で一つの世界を作り出している。変化をさせたと言うよりも言い添えたという感じが強い。しかし、一茶が笑いに転じたことによりそれに続く句も明るく調子のよいものになった。「候」は謡曲、狂言の会話語。

花の座が済んで、士英が裏の折端を

18　董の上にどさり寝聳る　　英

と詠んだ。前句で「あれ花が咲て候さき候」と言った人の動作として付けたのである。

季の詞は「董」で、春。「美しい董が咲いているよ。花見をした人がそこにどさりと寝そべった。気持ちのよい春の一時を我が物顔のようにして振る舞っている。」の意味。

「どさり」という擬態語で董の上に寝転んだ人間の大きさと重さが表されている。この表現からその人は子供ではなく、重量感のある大人であることが分かるのである。

これで裏の十二句が終わる。

裏（ウ）の展開の付け数は、掬斗が三回、士英が三回、柏葉が一回、春甫が二回、一茶が一回であった。

一茶は一回であったが、展開を大きく変える働きをなした訳で師として役目を果すものであった。

四、名残の表（ナオ）

19　うす霞気儘仲間に入にけり　　宇

20　猪喰ふ家をたてし象潟　　茶

21　紙草履ちよ［ろ］〳〵川にほうり込　　甫

22　さあ故郷の咄しはじめん　　宇

23　ゆづられし一ッ茶碗や宝なる　　魚淵

24　冬中籠る槇の下庵　　茶

25　さゞん花のはなが咲とてなむあみだ　　甫

26　ことしの師走よいしはす也　　英

27　鼻唄にほく〳〵帰る座頭の坊　　葉

28　迹の祭りに御能始る　　斗

29　引うける大盃の秋の月　　淵

30　一首侍れと配る蔦の葉　　甫

名残の表に移って折立の句を付けたのは松宇で、

19　うす霞気儘仲間に入にけり　　宇

とした。季の詞は「うす霞」（霞）で、春。

前句の「菫の上にどさり寝聳る」のどさりと寝そべった男の持つ雰囲気を「気儘」な気分として「菫が咲き乱れている野原にうす霞もかかってまさに春、その喜びにうかれて自分も気ままな仲間に加わったことよ。」と言ったのである。

この人情の句の世界を一茶は

20　猪喰ふ家をたてし象潟　　茶

と詠んだ。季の詞は「猪」で、冬。

「気ままな仲間が寄り集まって捕えた猪の肉を鍋にでもして楽しくつつこうと象潟に家を建てた。」のである。「象潟」の名勝を折り込んで「場」を限定し一転させた。象潟は秋田県の象潟で、日本海にのぞむ名勝として松島と併称されている。一茶には寛政元年八月にこの地を旅した経験があった。その折りに作った発句に

象潟もけふは恨まず花の春　　（寛政元年）

があり、その後も

象がたやそでない松も秋の暮　　（文化八年）

象潟の欠をかぞへて鳴千鳥　　（文化十年）

象潟や佐倉をたべてなく蛙　　（文政三年）

を作っている。また、連句においても

終の栖は出羽の象潟　　（文化七年）

象潟は画に書きてさへ小淋しく　　（文化十一年）

の付けが見られる。これらから旅行した象潟の印象が強かったことが窺える。ここでは「場」の転換を図るために用いたものと考えられ、名勝の起用が運びに生きている。

次を春甫が

21　紙草履ちよ［ろ］〳〵川にほうり込　　甫

と付けた。季の詞はなく、雑。象潟の土地柄をにらんで、その象潟に小川を設定した。

「家の近くに小川がある。そのちょろちょろと流れている川に用済みの紙草履をほうり込んで捨てた。」の意味。「紙草履」は紙をよって作った草履のこと。紙衣は洗濯が利かず、着捨てになったというが、紙緒の草履もごく粗末なもので、掛け流し（一度使用したものを二度と使わないで捨ててしまうこと）にしたと言う、これをもじって川の流れに捨てたと戯れたのであろうか。

次は、焦点を「ほうり込」んだ人物に当てて

22　さあ故郷の咄しはじめん　　宇

と、その人の発言に仕立てて松宇が展開した。これも季の詞はなく、雑。

「紙草履もこのちょろちょろ流れる川にほうり込んで捨てたこと

だし、さあ今度は故郷の話でも始めようではありませんか。」というのである。

「さあ」「はじめん」と呼びかけた俗語表現が野趣を醸し出している。

次を付けたのは魚淵（なぶち）で、魚淵は遅れて加わったらしくここから運座に出ている。付けたのは

23　ゆづられし一ツ茶碗や宝なる　　魚淵

で、これも季の詞はなく、雑。

「故郷の話を始めようと言われたので、ひとつしましょう。わたしにはある人から譲られた取って置きの茶碗が一つあるのですよ。それはわたしにとってはまさに宝なのです。」と話の内容の一つを提示する形で展開させた。「宝」だという措辞によって茶碗の価値が想像出来る。

魚淵は姓を佐藤と言い、長沼の人で、文化七年十二月頃からの門人。農業のかたわら漢方医を営む文人であった。

この「ゆづられし」の長句に一茶が

24　冬中籠る槙の下庵　　茶

と展開させた。季の詞は「冬」（冬籠り）で、冬。「槙」は良質の木材になる木。「下庵」は山間などにある粗末な庵。

「譲られた茶碗を宝物として眺めては毎日を過ごしている。寒い冬で外に出ることも出来ない山間の粗末な庵であるよ。」というのである。人情の句ではあるが、「下庵」で止めたことで叙景の印象が強くなった。良質の木材で建てた庵を「下庵」と表現したことから、この人の豊かさが現われている。

人情の句が続いた今までの展開を一直して叙景に転じた一茶の意図がくみ取れる。

この庵の庭に視点を変えて春甫が

25　さゞん花のはなが咲とてなむあみだ　　甫

と、宗教心を提示した。季の詞は「さゞん花」で、冬。

「長い冬を人里離れた山間の庵で過ごしているよ。すると、毎日の小さな変化に自分が生かされていることを感じ、今日は山茶花の花が咲いたと言って南無阿弥陀と唱え感謝したよ。」の意味。

これは前句の下庵にこもっている人を今度は信仰の篤い人に見立て変えたものである。一茶の住む地方では庶民の宗教である浄土真宗が広がっていた。それを下五の六字名号のお題目に持って来たのであろう。

これに続けて士英が

26　ことしの師走よいしはす也　　英

とした。季の詞は「師走」で、冬。

時を年末に移して「なむあみだ」と唱えた人の一年の感慨を詠ん

だもので、「冬になって家の中に籠もる日々が続いて今年もいよいよ終わりの十二月を迎えた。何かにつけて仏様の御加護をありがたく思っているが、この十二月によい事があって、一年の締めくくりとして相応しい師走であることだ。」の意味。

「師走」の繰り返しによる畳み掛けが明るい雰囲気を出しており、良い師走を迎えた喜び、恙なく新年を迎える喜びを感じさせる。

明るいリズムのある詠み振りを承けつつ柏葉は

27　鼻唄にほく〳〵帰る座頭の坊　　葉

と、冬の句が三句続いたので季なし（雑）の句を付けた。

「今年の師走は良い師走だなあと喜び、目の悪い坊さんが鼻唄を唄いながらほくほくと杖をつきつつ歩いて行くよ。」の意味。

「ほく〳〵」は杖をつく擬音語だが、「鼻唄」に続いて置かれたことによってほくほく顔という連想を呼び、嬉しさを隠し切れない坊さんの姿が浮かび上がる。前句の「よい師走」から浮かぶ喜びが「鼻唄」や「ほくほく」を使ってうまく表されている。しかし、打越の句に仏教語があり、ここでも坊さんと仏教に関わるものが出て来て、この点が障りとなって気になる。

次を付けたのは掬斗で、

28　迹の祭りに御能始る　　斗

とした。季の詞は「祭」で、夏。「迹の祭り」は祭礼の翌日の意であろうか。能は幕府が正式に認めたものであった。祭に能が行われたところにこの祭の格式が現れている。農村でも能を行ったということがわかる。

「ほくほくと杖をつきながらお坊さんも帰っていったあとに御能が始まった。」の意味。

ここが月の定座の前であるため、次に月の句が付けやすいようにと意識し、「能」を配してさらりと詠んだものと考えられる。

月の定座を詠んだのは魚淵であった。

29　引うける大盃の秋の月　　淵

季の詞は「秋の月」で、秋。月の座。能を薪能に見立て変えた展開である。

「御能が舞われているかたわらで持たれている酒宴。その席で、飲むのを引き受けた大きな盃になみなみと酒が注がれた。その酒に秋の月が映っているよ。美しいことだ。」の意味。

盃と月の取り合わせが響きあって、月の美しさを引き立てている。

これを承けて折端の句を

30　一首侍れと配る蔦の葉　　甫

と春甫が詠んだ。季の詞は「蔦」で、秋。

「盃に注がれた酒に折からの満月が映っているよ。何と趣きのあることだ。それを見て詩心が湧いてきたでしょう、一首和歌を詠ん

でくださいと傍らにあった蔦の葉を配っている。」という場面が想像される。

和歌を書き付けるものに蔦の葉を配したところに庶民の風流が窺われる。

以上で名残の表が終わり、名残の裏につづく。

五、名残の裏（ナウ）

31　行灯にひ［よ］ろ〳〵青い虫が鳴　　斗
32　何ぞふるまへ箱根越す馬　　英
33　しら〴〵と弓持ち五人夜の明て　　淵
34　小便所としるす立札　　茶
35　団子屋が場とりし［て］おく花の山　　斗
36　雉の尻尾へたばこ吹く也　　鏡

名残の裏の折立は、掬斗の

31　行灯にひ［よ］ろ〳〵青い虫が鳴　　斗

で、これは前句、春甫が詠んだ「一首侍れと配る蔦の葉」を承けた長句である。季の詞は「虫鳴く」で、秋。

「一首詠んでくだされと配られた蔦の葉、これを前に思案していると、日が暮れて座敷に行灯が灯された。その灯を慕ってどこからか、青い虫がひょろひょろとやって来て、鳴いているよ。」の意味。弱々しい虫への同情。

「青い虫」の「青」は前句の蔦の葉の色から連想されたものであろう。「場」が屋内に転換され、色彩感覚を生かした句が付けられた。

この場所を箱根の旅籠に見立て変えて、士英が

32　何ぞふるまへ箱根越す馬　　英

と付けた。季の詞はなく、雑。

「一日馬とともに歩いてようやく今夜泊まる旅籠に着いた。これから天下の箱根を越そうというこの馬にも何か腹一杯ふるまってやってくれ。」としたのである。

馬は重い荷物を運んで行くのであろう。そしてそれの持ち主は、農のかたわら運送を生業にしている農民であろうか。「何ぞふるまへ」の表現から農民（庶民）の力強さが伝わってくる。

飛躍的な変化のある展開となって興味深い句である。

これを承けて魚淵が

33　しら〴〵と弓持五人夜の明て　　淵

と詠んだ。馬は武士に許された乗物であったので、武士を連想した。これも季の詞はなく、雑。

「これから険しい箱根を越すから馬に何か腹一杯食べさせてもて

なしてやってくれと言って、弓を持った五人の武士が守りを堅め、徹夜で見張りをしている。やっと夜がしらじらと明け始め、姿がたのもしいと、その明るさがこの五人の弓持ちを浮き立たせている。」の意味。

弓は古代から用いられた代表的な武具の一つ。前句の馬を武士の馬に見立て変え、また「箱根」から箱根の関所を連想し、武士を配して人情の句に転じた。時間の移りが効果的。

次を付けたのは一茶で、

34　小便所としるす立札　　茶

とした。これも季の詞はなく、雑。

「夜がしらじらと明け始めて五人の弓持ちの姿や顔が分かるほどになってきた。するとその傍らに、おや小便所という立て札があるではないか。」というのである。箱根の関所に小便所を配し、笑いを誘う。

一茶は、次が花の定座であることも考えて前句の持つ物々しい雰囲気に小便所の立て札を取り合わせて軽い調子（笑い）に転換させたのであろう。また、この笑いは武士も人間だと皮肉っているようにもとれて、ここに一茶の特質をみることができる。

この小便所の立て札が立っている所を花の山に、またその使用者を花見の客に見立て変えて付けたのが次の掬斗で、

35　団子屋が場とりし［て］おく花の山　　斗

と展開させた。季の詞は「花の山」で、春。花の定座。

前句と合わせての意味は、「小便所と書かれた立て札も立てられて花の山はいよいよ花見客を迎える準備が整えられた。ここで、一儲けをしようと団子屋もその店を開く場所をとっている。一番儲かりそうな所を探して。」となる。

桜の、いわば天然物の美しさその物を詠むのでなく、それに小便所と団子屋といった人間くさいものを取り合わせているところに粗野な庶民の生活を感じさせる。

次はいよいよ挙句で、素鏡が

36　雉の尻尾へたばこ吹く也　　鏡

と締めくくった。季の詞は「雉」で、春。

前句の団子屋の動作を詠んだもので、花見客を当て込んでいい場所を確保した団子屋が一服している場面にしたてた。

「団子屋の店を出す場所もとったことだし、あとは客を待つばかりだよとばかりに、煙草を吸って一休みしている。すーと吸い込んだ煙を折から近づいて来た雉の美しい尻尾に吹きかけて遊んでいるよ。」というのである。

団子屋ののどかな姿が目に浮かんでくるようである。

これで「鼻先の生姜畑や一しぐれ　春甫」を発句とする歌仙が満

尾したことになる。

六、おわりに

この歌仙は、一茶と一茶を師と仰ぐ人々、春甫、松宇、呂芳、素鏡、柏葉、掬斗、士英、魚淵の九人で巻かれている。句数を見ると、春甫六句、松宇三句、呂芳一句、素鏡四句、柏葉三句、掬斗六句、士英五句、魚淵三句、そして、一茶五句となっている。一茶の五句のうち、十六句目の「徳利こかすなやよ太郎冠者」や三十四句目の「小便所としるす立札」には滑稽味や俗っぽい軽さが表されて、句風に一茶らしい特徴が見られる。また、これらは転じにおいては単調な流れを変える付けとなっており、一茶の指導者としての立場を見ることが出来る。

一茶が付けた脇句「囲炉裏ばた迄鶏遊びつゝ」は、その季節、その場が詠まれた発句の、家のすぐ近くに生姜畑がある農村の風景に添い従うように、その農家を引き立てるように付けられている。この付けから一茶の農民意識を酌み取ることが出来るのだが、これは歌仙の運び全体に漂う田舎的な雰囲気につながっている。そこで、展開の中で詠まれた農村（田舎）の風景あるいは、農家の生活・様子に関わる素材を取り出してみると、

畑、野良、ちょろちょろ川、山、別れ路、石橋、蔦の葉、董、雉、烏、虫、鶏、馬、囲炉裏、配餅、はした芝居、浄土真宗の南無阿弥陀、など

があげられる。転じ・変化の運びはあるものの、これらの素材が先述の雰囲気を醸し出しているのである。いずれも、信濃の風景、あるいは生活に関わるもので、運座に集まった人々にとっては馴染みの深い物である。このことから、一茶たちが付けを考える上で自分たちの暮らしや意識を背景にしている点を指摘することが出来よう。みな、信濃の人々であり、一茶も含めて自然環境、生活環境において共通の意識を有していることからくるものと考えられる。

参考文献

『一茶全集』第五巻　信濃毎日新聞社　昭和53年11月刊
『一茶全集』別巻　信濃毎日新聞社　昭和53年12月刊
『一茶の総合研究』矢羽勝幸編　信濃毎日新聞社　昭和62年11月刊
『定本高浜虚子全集』第十二巻　毎日新聞社　昭和49年9月刊